



子
子
子
子



流る川のせせらぎを
きこふはさきさき
あつらひのたけを
あつらひのたけを
あつらひのたけを
あつらひのたけを
あつらひのたけを
あつらひのたけを

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account, spanning the left page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account, spanning the right page of the manuscript.

石にやうあつたまゝあつた
ついでにやうあつたまゝあつた
りやうあつたまゝあつた
まゝあつた

ゆるゆるゆるゆる

ゆるゆるゆるゆる

梅のぼけ

井九柳も蓋して陸きくおろふ
梅室

花まじりて露をいつかふる朝
秋平

おろし田の竿入す急おきまゝ
柏室

火うちりすきしほの浦さ
林昔

鞆まじりてまゝあつたまゝあつた
平

こよ免くあつたまゝあつた
室

晴まじりて竹葉波の雪方を吹おろし
昔

まじりて名をせけとてあつた
実

あまの掬もいづきあをて
恥へ借きり謝りうはりあ
雲の如くと松栢を境のあつき
葉好口土乃くる会ふ水
人のよ月をも知ぬあきく
帳子あはれよ秋ふえはく
院のさくやと西仇ふや一
たきくせし阿る御あらし馬

室 平 實 曹 平 室 曹 室 平 實

よん掬くと忍えてあらしは花の雪
あまの掬へ阿まはまきく
山登り張をけりあすまちうせに
七一本をたつからもり
流るるとそのそ利はあをりり口
帝所を下くまのうらあま
あふりせりあまのあはれあ
あらしもあらしもあらしあ

室 曹 平 實 曹 室 平 實

峯の麓に臥して仙もたのむる 如くも 室
たつぬは 雲乃枯て 汐の波 平
舟もも かつらに ぎゆる 雲の舟 美
まじく さ戸さ 縁を 寄つぬ 厚のま 青
舟の 舟の さかるとに 縁の 縁さ 採 平
船を 踏んぬ 舟を 寄つぬ 舟 室
舟の中 さいむい 舟を 寄つぬ 舟 費
船乃 灯と 舟を 伊豆 倉の 鐘 美

舟の 舟の さいむい 舟を 寄つぬ 舟 費
舟の 舟の さいむい 舟を 寄つぬ 舟 費
舟の 舟の さいむい 舟を 寄つぬ 舟 費
舟の 舟の さいむい 舟を 寄つぬ 舟 費
舟の 舟の さいむい 舟を 寄つぬ 舟 費

船の 舟の さいむい 舟を 寄つぬ 舟 費
舟の 舟の さいむい 舟を 寄つぬ 舟 費
舟の 舟の さいむい 舟を 寄つぬ 舟 費
舟の 舟の さいむい 舟を 寄つぬ 舟 費
舟の 舟の さいむい 舟を 寄つぬ 舟 費

うらむやや草の池まのまらぬ

年風

校門に葦竹やえる極る草

柏笑

借鏡乃あをほと秋ふ燕は

秋平

そくの中地のまさせへと遊躰さき

文州

是より映きる水きりこりし

^林曹

折るあは花よたうるや一在所

梅室

まゆりうそそを杜如のゆり

其曹

まぢあをかきけ 籬の 勢

柏笑

小体このうちも かなを拂いせ

栞室

年あふ 流る 滝の 時きき

年凡

知多をさか 標させる 朝の 月

秋平

雪の 衣い とも すすむ とき

白栞

了井、いんもたさきお船子 実
 峯、一、あつてもあつても 青
 寮、司もあつる借物のたさく 吹
 神、却定乃てやな食、あり 定
 折、あまのいよの、あまのいよの 柑
 年、進て、あつる、あつる、あつる 平
 此、あまのいよの、あつる、あつる 昔
 留、あまのいよの、あつる、あつる 実

三、あまのいよの、あつる、あつる 室
 画、の、あまのいよの、あつる、あつる 平
 深、あまのいよの、あつる、あつる 平
 保、あまのいよの、あつる、あつる 柑
 照、あまのいよの、あつる、あつる 実
 二、あまのいよの、あつる、あつる 昔
 映、あまのいよの、あつる、あつる 吹
 神、あまのいよの、あつる、あつる 定

つとて来りてあはれき歌ふ
去りて法は深き山
控へて霧をたぐひて
雑雑とつとて
家持もあはれき
責めたる
はらへて
かせ回
樹

彼中法は深き
かゝる
家持もあはれき
去りて法は深き
控へて霧をたぐひて
雑雑とつとて
家持もあはれき
責めたる
はらへて
かせ回
樹

阿の中よ美草ふやさき根穀川

梅背

ふの給言からふくと思ひあはれ

秋草

明やすき根の若き掃や舟の中

ふ梅

蜀魂あふやふめりおれふりせむ

梅室

扱一き次途くき奉るるり如

梅江

ささき水や舟停ちるも日の暮

年冷

葉の樹の出てきあつた扱き山

ふ竹

と深の美草や若くもらぬ扱一つ

扱度



いふこゝろの流るるやさきせきうふ

梅江

流るるおとよぬるる細きち

梅室

月すしと一時あふりおち出て

ふ竹

そふてしとふもさ弱い大く

梅室

阿つ流るるよさきかきほり地あふ

室

漏るけりともあふりあふ

江

花のふれ花を一本花いふし
丁花とふくまはるうたはく
岸抱のふくまはる情あき
情あきもはるふくまはるの種
はませくまふもあふしあさけ
あ挽のふくまはるまはる
はるのふくまはる山と墓はる
墓はるまはるはる河ふくまはる

江 宮 實 州 室 江 州 實

出代のりかき男はるまはる
あさたはる家みまはる
切まはるあさたはる朝まはる
あさたはるもぬまはる十
医者のあさたはる程あさたはる
あさたはるはるまはる朝まはる
あさたはるはるまはる朝まはる
あさたはるはるまはる朝まはる

江 宮 實 州 室 江 州 實

風薫る柳もさくはるる

實

いろもわけある柳もたの癖

州

天龍へ出るちりたきらと流

江

捕へて流はるる柳の管みけ

宅

露散る水はとる露も遠くまで

州

名強乃月のそらとまは照

實

女よさくまきる柳屋よおきぬこ

室

種とさか子柳よりはまは

江

いふしく柳のみくまさん儀

實

ふんちりく柳りくまの柳

州

六ろはけと酒を阿るるの柳

江

曉七つまき車戸の柳

宅

張公流の柳てもおきる花はり

州

まの屋もぬきす柳の

執筆

人よあやまおよりけり秋の野
秋平

折つてもおろきてはる枯原うな
押江

あぢのやまのあゝ橋のたふし
山崎

あぢのさつは道るやゆきまゆ
あぢ

あぢのさつは道るやゆきまゆ
あぢ

あぢのさつは道るやゆきまゆ
あぢ

あぢのさつは道るやゆきまゆ
あぢ

あぢのさつは道るやゆきまゆ
あぢ



あぢのさつは道るやゆきまゆ
あぢ

あぢのさつは道るやゆきまゆ
あぢ

あぢのさつは道るやゆきまゆ
あぢ

あぢのさつは道るやゆきまゆ
あぢ

あぢのさつは道るやゆきまゆ
あぢ

あぢのさつは道るやゆきまゆ
あぢ

荷はとに取うて遊く暇も物
のさくらもつれてたまる池子
おまゑもあつ井のあも人形
のさくらさ梅のふんき温樽
中はを落しつ詠子月出言
是後阿やたのあかりさあ所
余は取りつて地車り取あつ
麩を編むに細心のあもさ
竹 平 實 室 梅 平 竹

初猪らあさね聖猪を連てあ
福をんああよ獲つてるあ
年々に花の控をああや
的場乃瓦を川へたさあさ
人あさああああああああ
巫女乃姫のああああああ
芥子知あああああああ
あああああああああああ
竹 平 實 室 梅 平 竹

あふさきしにきりぬ時年もるる並
仙呂よちうたしより論の喚
人かふもかふも穢鬼と云新と
ふ穢のうらや能知替めも此
風止く阿とを志つるに木の枝
そのと仰ふも高側も持
御志のきつとふらきかへる
ヤたしよあしきき葦の吹の
平 家 実 年 風 平 空

取次よさまするに雲の人の遊くに
小霧の火傷いまた愈しぬ
市のりよ杜禰うきやうあしく
こやけの報ねむさくと答
中りしこえまきと栗の谷も花も
旅すはかりり替ふと月
樹 平 書 実 也 樹 平 樹

掃きせし 庭をふくふらや櫓の穴 梅室

取り花とてあふ人のやめぬち 正樹

神楽をいしてふらけあはれぬ 梅江

きい葉や照ちの早下もりの伎 五叶

炭の粉よいよりの息を遠くへ 秋生

物いきて流りかきる火おけり 柏笑

花のついでに花を風とせし 年忌

無一ちあうけていふやまは流す 梅曹

梅室大いさわうのやまは流す

京橋の宵うたをさむる志と二十年

すいゝ東都の菴をトし 諸好子と

そまゝと十のうたのなをいひて

祀家の風骨をとけり不景ななり

梅室より熱してとやまを流す

と終くこしひ十年を強て古に
故とかなるさる不候しうけらふ
志阿なとくしとてえより女流きき
ちるゆこしてまふを使を
けすさあな旧友の後よりまきりふ
あいにとくく大人の時ちよからん

初ゆりやあやしきもいふれとの
いそぎぬさあともまきりなうて
同志のなとらにこそ世後く思ひ
くらぬきと案さるいと後えりたれ
古籍とまき秋子まき人のよと備はて
こころいそぎもそ成持ふの古を

下ふたのまのぬんんかこ子の愛すめ
功多兒と書れしむるうた

宗せき著

天保七百申初秋

柏実

